

「正しい支援」よりも、「その人らしい人生」を ～ドラマ『ダウナタイム』から考える福祉のパターナリズム～

最近、『ダウナタイム』というドラマを観て思ったこと。

形成外科医と美容外科医という、同じ「医療」に携わりながらも、患者に向き合う価値観の異なる二人の医師が描かれているドラマである。

特に第2話、第3話を観ていて、私は医療の世界だけではなく、福祉の支援についても考えさせられた。

形成外科医の沼田文は、「命を救うこと」を医師としての使命と考えている。

一方、美容外科医の遠山凜は、「美しくなりたい」という患者の願いそのものにも、その人が生きていくための大切な意味があると考えている。

ここには、非常に難しい問題がある。

医療者から見れば、「命を救うこと」は何よりも優先されるべきことに思える。しかし、患者本人にとっては、単に生命を維持することだけが「生きる」ということではない。

どんな自分で生きたいのか。

誰と、どのように生きたいのか。

何を大切にしたい人生を送りたいのか。

そうした価値観まで含めて、その人の「生きる」を考える必要がある。

このドラマが突きつけてくるのは、まさに「誰のための医療なのか」という問いではないだろうか。

そして、この問いは、そのまま福祉にもつながってくる。

福祉の専門職は、利用者の生活をより良くするために支援を行う。だからこそ、専門的な知識や経験を持つ支援者ほど、「こうしたほうがいい」「こちらのほうが本人のためだ」と考えやすい。

もちろん、それは悪意からではない。

むしろ、「本人を何とかしてあげたい」という善意から生まれる。

しかし、そこに落とし穴がある。

支援者が「本人のため」と考えることと、本人が「自分はこうしたい」と考えることは、必ずしも同じではないからだ。

たとえば、支援者から見れば外に出たほうがよいと思う人が、本人にとっては、まず安心できる場所で過ごすことが必要なのかもしれない。

支援者から見れば就労したほうが自立につながると思っても、本人にとって

は、まず人との関係を取り戻すことが自立への第一歩なのかもしれない。

「もっと活動したほうがいい」と思っても、本人は静かに過ごす時間を大切にしているかもしれない。

つまり、支援者が考える「より良い生活」と、本人が望む「より良い人生」は違う可能性がある。

ここに、福祉におけるパターナリズムの問題がある。
パターナリズムとは、本人の利益を守ることを理由として、本人の意思よりも支援者側の判断を優先してしまう考え方である。

「あなたのためだから」
この言葉は、とても優しい。
しかし、その優しさが、本人の選択肢を狭めてしまうことがある。
「あなたのためだから、こうしたほうがいい」
と言われ続ければ、いつの間にか本人は、
「自分で決めなくても、支援者が決めてくれる」
という状態になってしまう。

それでは、自立支援という言葉とは反対の方向へ進んでしまう。
大切なのは、支援者が「正解」を持っていると考えないことなのだと思う。
専門職の役割は、本人に代わって人生を決めることではない。
本人が自分の人生について考え、選び、決めることができるように、必要な情報を提供し、選択肢を一緒に整理し、迷ったときには考えることを支えることである。

もちろん、本人の意思を尊重することは、「何でも本人の言う通りにする」ということではない。
生命や安全に関わる問題については、専門職として伝えるべきこともある。

だからこそ、
「私は専門職としてこう考えます」
と伝えた上で、
「あなたはどうしたいですか？」
と問い返すことが重要になる。

支援者の専門性と、本人の自己決定。
その二つを対立させるのではなく、両方を大切にすることが、本当の意味での専門的支援なのではないだろうか。

『ダウンタイム』を観ていて感じたのは、医療の専門性を否定することではない。

むしろ、専門性が高いからこそ、その専門性を「本人の人生を決めるため」に使うのではなく、「本人が自分の人生を選ぶため」に使う必要があるということである。

これは福祉にも、そのまま当てはまる。

支援者が「してあげる」のではなく、本人と一緒に考える。

支援者が「正しい方向へ導く」のではなく、本人が選べるように環境を整える。

支援者が「幸せにしてあげる」のではなく、本人が自分にとっての幸せを見つけられるように寄り添う。

そして、ときには支援者自身が、

「自分は本当に本人のために支援しているのだろうか。それとも、自分が考える『良い人生』を本人に押しつけてはいないだろうか」

と振り返ることも必要なのだと思う。

福祉における「尊厳」とは、単に大切に扱うことではない。

その人の人生は、その人自身のものであるということを認めること。

そして「自分の人生をどう生きるか」を、その人自身が決める権利を守ること。

専門職に求められているのは、本人の人生を正しい方向へ導くことではなく、本人が自分らしい人生を選び取っていくことを支えることである。

『ダウンタイム』は、美容医療を題材にしながら、実は「人の人生を誰が決めるのか」という、とても普遍的な問いを投げかけているのかもしれない。

そしてその問いは、私たち福祉に携わる者にとっても、常に自分自身に向けなければならない問いなのだと思う。

「あなたのために」と言う前に、

「あなたは、どう生きていますか？」と尋ねる。

そこから、本当の支援が始まるのではないだろうか。

「正しい支援」よりも、 「その人らしい人生」を

～ドラマ『ダウンタイム』から考える福祉のパターナリズム～

ドラマが
教えてくれた、
支援の本質



命を救うことが
医師の使命
(形成外科医)

「生きる」とは
命を維持することだけではない。
どんな自分で生きたいのか。
誰と、どのように生きたいのか。
何を大切にしたいのか。



美しくなりたい
という願いにも
生きる意味がある
(美容外科医)

福祉の現場でも…

支援者は「本人のために」と考え、
専門的な知識や経験から
こうしたほうがいいと思うことがあります。

外に出た
ほうがいい

就労したほうが
自立につながる

もっと
活動したほうが
いい

まずは安心できる
場所で過ごしたい

人との関係を
取り戻すことが
先かもしれない

その人には
その人の
「こう生きたい」が
あります。

ここに、福祉におけるパターナリズムの問題があります。
「あなたのためだから」という優しさが、
本人の選択肢を狭めてしまうことがあるのです。

大切なのは、支援者が「正解」を持つことはありません。

専門職の役割は、本人が自分の人生について考え、選び、決めることができるように、
必要な情報を提供し、選択肢と一緒に整理し、迷ったときには考えることを支えることです。

「あなたのためだから」ではなく、
「あなたは、どう生きたいですか？」

その問いから、本当の支援が始まります。

支援するとは
何かを、
改めて考える
機会になります
ように。

